

# 教宣 せぶん

## ハダカの王さま

「 に」という口癖がある知り合いがいました。おしゃべり好きな彼は、ここで、誰と話しても「 に」という口癖を使って、会話のリズムをとっていました。回りの誰もが「 に」という言葉が彼の口癖だということを知っていましたし、当然彼も、自分には「 に」という口癖があるとわかったうえで、使っていると思っていました。

ある日、酒を飲んでいる席で、ある人が「お前、『 に』っていうの、口癖だよな。どんな時でも使っているぞ」と指摘しました。「えっ。ホント？全然気づかなかった」と彼はビックリした表情でこたえました。ビックリしたのは彼だけではありません。彼が自分に口癖があることを気づいていなかったことに、その場にいた周りも一様にビックリしました。自分のことが「見えていない」「わかっていない」「気づいていない」とはこういうことなのか、とその知り合いのリアクションを見て思いました。指摘したのは彼の先輩格に当たる人、周りで驚いたのは彼の後輩たちでした。それ以来、彼は決してその「 に」という口癖を使わなくなりました。

いま、私たちの企業のトップもこれと同じ現象に陥っているのではないのでしょうか？ 私たちの組合が裁判に訴えたからといって、それを理由に「支援金を撤回する」という暴挙に出たことは、どう見ても常軌を逸しています。都労委の判断を無視し、都労委自体を蔑んでいる姿勢もどうかしています。自らの言動やふるまいを客観的に見る目やバランス感覚を失っていると思えます。イエスマンで固めた回りの取り巻きは「客観性」に気づいていても、また「おかしい」と思っても、当然王さまであるトップに「忠告」などできません。また「おかしい」と指摘する私たちの主張は、私たち自体を色メガネで見ているため、心に響きません。どうしたらよいものなのでしょうか？

NHKの要職にも就く私たちの企業のトップが、裸で外を歩き出す前に、彼の立場の上の者か、彼が耳を傾ける人が「真実」を教えてあげればよいものを、と願って止みません。ちなみに「物語」では純真な子供の声に王さまは目覚めたのですが。